

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12348

研究課題名（和文）トルコ・アナトリアの文化遺産をめぐる物語の構築戦略

研究課題名（英文）Turkish strategies for constructing narratives around cultural heritage in Anatolia

研究代表者

阿部 拓児（Abe, Takuji）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：90631440

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：トルコ・アナトリアの文化遺産は、その地がたどってきた複雑な歴史ゆえに、たえず再利用・再解釈にさらされながら、重ね塗りのように形成されていった。他方で文化遺産は、それが価値づけられるに際し、結び付けられる文脈や置かれる場によって、いくつもの物語を生み出す。本研究では（1）文化遺産をめぐる複数の解釈が存在するなかで、トルコ共和国で何が「正しい物語」として選択され、それがどう構築されていくのかという戦略を問い、（2）文化遺産管理の担い手となったトルコ共和国にとって、みずからの体内に飲み込んだ「他者」の遺産が抱える価値とは何なのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、トルコ共和国内において、文化遺産をめぐる複数の解釈が存在するという前提から、ある解釈が「正しい物語」として取捨選択されていく過程、およびその戦略性を問うた。さらにはそれを鏡に、文化遺産管理の担い手となったトルコ共和国にとって、みずからの体内に飲み込んだ「他者」の遺産が抱える価値とは何なのかを照らし出した。とくに、他国、異文化との境界線に近い地域では、遺産管理のあり方をめぐる争いが先鋭化される状況が観察された。このことは、トルコ共和国内の個別的な問いが、文化遺産を管理するとはどういうことか、という一般的な命題へと昇華されうることを意味する。

研究成果の概要（英文）：Owing to the complex history of the region, cultural heritage of Turkish Anatolia has been subjected to constant reuse and reinterpretation and has been formed like layers of paint. Cultural heritage, on the other hand, creates a number of narratives depending on the place in which it is located and the context in which it is evaluated. Given the existence of multiple interpretations of cultural heritage, this study (1) analyzed the strategies of what is selected as the 'correct narrative' and how it is constructed in the Republic of Turkey and (2) examined what it means for the Republic of Turkey to manage the cultural heritage of 'others' found in its territory.

研究分野：西洋古代史・古代オリエント史

キーワード：アナトリア トルコ 文化遺産 歴史的重層性 正しい物語

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

アジア大陸の西端に突き出たアナトリア（小アジア）半島は、古来よりさまざまな民族が行き交う地であった。アナトリアの歴史を、エーゲ海沿岸にギリシア人らが植民都市を築いた時代から叙述し始めても、同地は大きく3度の文化的な転換によって区切られた、4時代の変遷を経験している。すなわち、ペルシア帝国・ヘレニズム諸王国・ローマ帝国と、統治国家を変えつつも、ギリシア語をドミナントな使用言語とし、八百万の神々の信仰にたいして寛容であった古典古代の時代。この伝統的な多神教社会を「異教」として否定することによって成立してきたキリスト教世界の一翼、中世ビザンツ帝国の時代。後発ながら、既存のキリスト教社会をコントロールしつつ、イスラーム世界の雄として君臨するセルジュークおよびオスマン帝国の時代。そして、いったんは宗教を国家から峻別し、世俗化＝政教分離を目指しながらも、新たなナショナル・アイデンティティを模索し続けているトルコ共和国の時代である。

しかし、上述のような転換を経るたびに、既存の文化や伝統が完全に消去されてきたわけではない。むしろ、後から成立した社会は前時代の文化や伝統をしたたかに内に取り込み、またそうすることによって、前時代のそれもしぶとく生き残っていった。したがって、現在のトルコ・アナトリアの文化遺産は、たとえるならば、スクラップ・アンド・ビルドによって新築されたわけではなく、たえず再利用・再解釈にさらされることによって、重ね塗りのように形成されていったのである。

今この「歴史的重層性」に着目するならば、トルコ共和国にとって中世以前に起源をもつ文化遺産は、けっして断絶したる他者の帰属物ではなく、みずからの文化の構成要素ともなりうる。このようなねじれ現象こそが、トルコ共和国における文化遺産をめぐる問題を複雑に、——しかし、それだけに意義深く——しているのである。では一体、それにとまなう再利用・再解釈には基準や法則性が存在するのであろうか。あるいは、そこに何らかの見えざる意図を読み取ることができるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究はトルコ共和国内の文化遺産がどのように解釈され、どのように提示されているかを分析することによって、アナトリアの「歴史的重層性」の現在地を見定めることを目的とする。

そもそも、文化遺産を価値づけるにあたって、絶対的な評価など存在しえない。ある文化遺産が何なのか——そもそもそれは本物なのか——という根本的な問いから始まり、それをどのような文脈と結びつけ、どこに位置づけるかという作業のなかで、複数の物語が生まれてくる。学術的に誠実であらんとすればするほど、一つの可能性に絞ること、あるいはオルタナティブな解釈を切り捨てていくことは難しい。このようなアカデミアにおける制約とは裏腹に、たとえばユネスコの世界遺産登録を目指すなど遺産としての価値を幅広く認知させるためには、複数の可能性のなかから、ある一つの物語を積極的に選び取る必要がある。学問的な禁欲主義と、「正しい答え」を求める社会的な要請とのギャップは、どのように埋められるのだろうか。

本研究は、トルコ共和国内における文化遺産をめぐる特定のストーリーを否定することを目指しているわけではない。まずは、文化遺産をめぐる複数の解釈があるなかで、どれが「正しい物語」として構築されていくのかという戦略を問う。さらにはそれを鏡に、文化遺産管理の担い手となったトルコ共和国にとって、みずからの体内に飲み込んだ「他者」の遺産が抱える価値とは何なのかを照らし出すのである。

3. 研究の方法

上掲の課題にたいし本研究は、以下の3名の研究者によって取り組んだ。阿部（研究代表者）は、西洋古代・オリエントの文献史学を専門とし、これまでも古代アナトリアの文化・社会のあり様について論じてきた。本研究において、阿部は歴史学者の立場から、ある文化遺産をめぐる物語の妥当性とそれ以外の可能性について学術的に提案した。中近世アナトリアの都市史・建築史の専門家である守田は、アナトリアがキリスト教化されて以降の遺構・遺物の分析および、建造物全般の復元・再建の妥当性を論じた。また、守田はユネスコの諮問機関である日本イコモス国内委員会の委員であるとともに、国内の歴史的建造物の持続的な保存活用にかんする調査研究や文化財登録への援助活動の経験から、文化遺産をめぐる物語の戦略的重要性について意見を述べた。もう一人の研究分担者である田中の専門は、社会人類学である。長年地中海地域をフィールドとして、トルコ共和国における文化遺産の所有および帰属の問題を論じてきた田中は、遺跡の保全のあり方や見せ方、またそれらについての関係者への聞き取りから、文化遺産をめぐる特定の物語が選り取られていく過程や文脈を捉える。大まかな役割分担としては、阿部・守田が文化遺産の有する複数の可能性を提示し、守田・田中はそのうちの 하나가オフィシャルな物語へといたる取捨選択の道——何がすくい取られ、何がこぼれ落ちたのか——の分析を担当した。

4. 研究成果

本研究は研究期間全体を通じて、新型コロナウイルスの流行とのにらみ合いであった。研究開始の初年度にあたる2020年がコロナ元年となったため、最初の2年間はほぼまったく身動きがとれない状態であった。オンラインでの会合も数度おこなわれたが、それらはすべて「コロナが落ち着いていたら」という、仮定のもとで話し合われており、ことごとく空振りに終わっていた。しかし、世界的にコロナ禍が落ち着きを見せるようになった2022年度、そして研究期間を延長して迎えた2023年度の2年間は、当初計画していた、トルコ共和国内における合同調査にも漕ぎつけることができた。以下に、年度ごとの研究会の活動と、合同調査の対象地をリストとして掲げる。

- (1) 2020年 7月にオンラインによる会合をもち、研究を当初の計画より1年順延することを決定した。
- (2) 2021年 この年も、新型コロナウイルスが猛威をふるったため、夏季の現地合同調査は中止した。感染状況が落ち着きを見せた2021年末には、本研究が開始して以来はじめてとなる、対面での研究会を開催した（2021年12月11日、於・京都府立大学文学部・歴彩館）。報告者および報告題目はつぎのとおりである。
 - ①「ウシャク考古博蔵「クロイソスの財宝」の史的文脈と「盗掘言説」の再生産」（阿部拓児）
 - ②「アニ遺跡の歴史とその修復・保全にまつわる諸問題」（守田正志）
 - ③「廃墟か、モスクか、博物館か：トルコで進行するモスク化の動きについての試論」（田中英資）。
- (3) 2022年 新型コロナウイルス感染症の流行がやや落ち着きを見せ始めたことにより、ようやく研究を本来の軌道に戻した。2022年5月には福岡女学院大学にて、対面の研究会を開催した。報告者および報告題目はつぎのとおりである。
 - ①「イオニア・ポリス考」（阿部拓児）
 - ②「トルコの都市近代化——西欧とロシアの狭間で」（守田正志）。

また、9月5日から14日にかけて、本研究で最初となるトルコ共和国での現地調査を実施することとなった。調査地はつぎのとおりである。カラベル溪谷、マグネシア遺跡、クラロス聖域、ミレトス博物館、ミレトス遺跡（エスキバラト村跡、新バラト村をふくむ）、ミユス遺跡、ギュムシュケセン史跡周辺の公園整備、ウズンユバ遺跡、ラトモス山中の修道院（イエディレル修道院）、エフェソス考古学博物館、エフェソス遺跡。

なお、本研究は2021年度が当初研究計画における最終年度であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、1年間の研究期間延長を申請し、承認された。

(4) 2023年 新型コロナウイルス感染症による行動規制がほぼ全廃されたことを受け、ようやく平常の研究活動を取り戻した。2023年5月には北海道大学にて、対面の研究会をおこなった。報告者および報告題目はつぎのとおりである。

- ①「建築から見る東アナトリアの文化交流史とその現代的意義」（守田正志）
- ②「観光の場と信仰の場の交錯——グレート・アヤソフィア・ジャーミイとケシッキ・ミナーレと呼ばれたモスクの事例から」（田中英資）
- ③「新規研究課題の可能性について——トルコとイランの比較から」（阿部拓児）

また、9月1日から12日にかけて、トルコ共和国での現地調査を実施することとなった。調査地はつぎのとおりである。カルス市、アニ遺跡、ベシュキリセ、コズルジャ修道院跡、バナ修道院跡、クズルベンク教会跡、カルス博物館、クニドス遺跡、シデュマ遺跡、レトゥーン遺跡、パタラ遺跡、オイノアンダ遺跡。

2023年12月には横浜国立大学にて、本研究期間の総括となる研究会をおこなった。報告者および報告題目はつぎのとおりである。

- ①「アイザノイにみる小アジアの土着信仰とヘレニズム・ローマ都市の関係」（貞松知之一
東京工業大学：ゲストスピーカー）
- ②「バッファ湖周辺の文化遺産と自然環境」（阿部拓児）
- ③「世界遺産を通じた歴史の物質化：トルコ・アニ遺跡の事例から」（田中英資）
- ④「アニ遺跡内の建造物保存方法の現状：キリスト教教会堂建築とイスラーム建築の違いに着目して」（守田正志）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 阿部 拓児	4. 巻 75
2. 論文標題 アルカイック期から古典期のミレトス イオニアの景観・地政学・ポリス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 66～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 貞松知之、守田正志	4. 巻 -
2. 論文標題 支配と信仰の変遷からみるアイザノイのゼウス神殿の特殊性とその成立	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2020年度日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 349～350
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 阿部 拓児
2. 発表標題 移動するギリシア人、雇用するペルシア王
3. 学会等名 第73回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部 拓児
2. 発表標題 King of Countries Collects All the Fine and Beautiful Things
3. 学会等名 The 5th Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 阿部 拓児
2. 発表標題 アケメネス朝ペルシア帝国とギリシア人 『岩波講座 世界歴史 第2巻』刊行に寄せて
3. 学会等名 古代ギリシア文化研究所2023年度研究集会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 守田 正志
2. 発表標題 イスラーム世界のマドラサ：その建築的展開と現状（仮）
3. 学会等名 第48回地中海学会大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中 英資
2. 発表標題 「伝統的な田舎の村」の変容 トルコ地中海地方ゲレミシュ村におけるレンタルヴィラの乱立の事例からみた観光イメージと現実の相互作用
3. 学会等名 観光学術学会第12回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中 英資
2. 発表標題 未来を生み出す実践としての観光とヘリテージ トルコ地中海地方「リュキアの古道」トレッキングルートの事例から
3. 学会等名 観光学術学会 第13回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、富谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 342
3. 書名 古代西アジアとギリシア ~前1世紀	

1. 著者名 ダヴィド・ホシュタリア、ギオルギ・チャニシュヴィリ、ナティア・ナツヴリシュヴィリ、マノン・リルアシュヴィリ、篠野 志郎、守田 正志	4. 発行年 2023年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 260
3. 書名 辺境・カフカースの生きられた都市	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	守田 正志 (Morita Masashi) (90532820)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	
研究分担者	田中 英資 (Tanaka Eisuke) (00610073)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------